

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770159

研究課題名(和文) 倭訓栞を中心とした近世国語辞書の記述史に関する研究

研究課題名(英文) Inquiry on the History of Lexical Description in Edo Era Dictionaries with an Emphasis on WAKUN NO SHIORI

研究代表者

平井 吾門 (HIRAI, Amon)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：80722214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：近世国語辞書の語彙が形成されていく過程について、『倭訓栞』を中心に収録語彙の位相や典拠との関連性から分析を行った。その結果、『倭訓栞』は稿が進む中で「国語辞書を編纂する」という意識が高まり、より広汎な語彙の拡大が行われるとともに、客観的かつ多角的に語義を解釈していくという記述スタイルが出来上がっていくことが分かった。また『倭訓栞』では、用例を意識的に配置することで「読ませるための辞書」という側面が意識されていくことも判明した。さらに、従来研究が進んでいなかった「組み合わせ本」(取り合わせ本)『倭訓栞』について、編纂過程解明の大きなカギを握っていることを多様な側面から考察することが出来た。

研究成果の概要(英文)：This research shows a process of establishing Japanese language dictionaries compiled in Edo era centered on Wakun No Shiori, by analyzing the phases of the vocabulary and the influence of authority. Wakun No Shiori raised the awareness of "compiling a national language dictionary" through compilation, expanded wider vocabulary and got the description style which interpreted words semantically and objectively. Also, Wakun No Shiori gained charm as a reading material by arranging examples consciously. In addition, through this research, the value of "combination edition" of Wakun No Shiori was reviewed.

研究分野：国語学史

キーワード：国語辞書 倭訓栞 辞書史 谷川士清 記述史

1. 研究開始当初の背景

国語学史や国語辞書史の研究において、近代の国語辞書は近世(江戸時代)に成立した国語辞書から大きな影響を受けていることが従来指摘されてきた。しかし、その大半が明治時代の国語辞書の側から近世を評価しているというものであり、国語辞書の源流とも言うべき肝心の近世国語辞書については、明治時代以来のデータを伴わない印象論が現代にまで大きく影響を及ぼしている状況にあった。いわゆる三大辞書(『倭訓栞』『雅言集覧』『俚言集覧』)を中心に、主要な辞書についての基礎的研究は散見されるものの、近代的とされる記述や体裁を近世国語辞書が備えるに至った過程を解明しようとする巨視的な研究は為されておらず、特に信頼に足るデータに依拠する説得的な議論はほとんど行われてこなかった。なお、三澤薫生氏が先駆的に『倭訓栞』の本格的調査を進めていたが、データの扱いという点で当時は再検証の余地を残しており、乗り越えるべき目標として大きな刺激を受けることとなった。

代表者は従来、現代国語辞書の語釈の記述がどのように成立したのかということについて関心を抱いており、『倭訓栞』が近世国語辞書の源流であり頂点にあった書物であったのではないかと仮定してきた。『倭訓栞』(わくんのしおり)は国学者・谷川士清(たにがわことすが)(1709~76)によって編纂された書物で、それまでに無い規模で、幅広い位相の語句に実証的な語釈を施しているという特徴が知られているからである。この見通しのもと、緻密なデータ収集と継承・追検証可能な形でのデータ整備を念頭に置くことで、語釈を構成している諸要素や語彙排列の様子を調査した。それによって、「初期稿本である谷川士清自筆稿本の内部考証の重要性」を指摘し、『倭訓栞』は、編纂過程で語釈態度が変化したことで、近代国語辞書の祖形と言われてきた一面を形成した」ということを部分的にはあるが解明してきた。また、『倭訓栞』における語句の清濁についての調査を通して、当時最先端を行く国学者・本居宣長(1730-1801)の影響を受けつつも、谷川士清は伝統的国学の立場から脱することも出来なかったという事実を指摘し、『倭訓栞』は近代国語辞書と前近代的な国語辞書の側面を持つということを示した。なお、これら一連の研究結果は、平成に入って以降自筆稿本及びもう一つの重要写本(「清逸本」)の学術的調査が本格的に可能となっていたという情勢が大きく作用している。特に、三澤薫生『谷川士清自筆本『倭訓栞』影印・研究・索引』(勉誠出版、2008年)が出版されたことの意義は大きい。結果として、『倭訓栞』は従来の印象論で語られてきた以上に、その価値を厳密に再点検すべき書であることが分かったのである。

そのような状況の中で、辞書の中心部分を為す語釈記述の変遷に着目することで、従来

辞書史の中で一括して扱われることのなかった近世考証随筆類を射程に収めつつ、『倭訓栞』を中心とした近世国語辞書の成立過程を追うことが出来るのではないかと、という着想を得るに至った。

2. 研究の目的

本研究を通じた最終的な目的としては、江戸時代に編纂された国語辞書において、近代の辞書に繋がる語釈の体系がなぜ/どのように形成されていったのか?という点について解明することである。その解明に向けて、近代国語辞書の祖形を提示したと考えられてきた『倭訓栞』について、その学問や辞書編纂の態度が形作られていった具体的な様子を明らかにすることが直接の目的となる。その際、従来国語辞書史の観点から大局的に語られることはなかった近世考証随筆類について、その記述を辞書記述の流れに組み込むことを目指す。考証随筆は、特定の言葉や項目について、筆者なりの言葉で解説を加えていく類の随筆であり、国学者を含め、多くの近世文人が執筆していたことで知られている。そこで、『倭訓栞』を中心とした近世国語辞書の語釈体系をデータベース化することで、可能な限り考証随筆類を参照対象として、辞書記述史研究の基幹を為すことを目指すものである。また、派生的な目的としては、紙幅や利潤の為に編纂方針が限定された近世出版事情の下、新たな辞書の形が創造された過程を解明することで、ペーパーレスの進む今日に成立し得る国語辞書の可能性を見出すことについても射程に収めるものであり、辞書記述に及ぼした市場原理の影響、及びそれを排した新たな辞書の形も追究対象となる。さらに、『倭訓栞』研究のさらなる本格化を見据えて、全国に点在する『倭訓栞』諸本の調査を進めることで、その成立過程解明の大きなカギを握る資料の確認あるいは発見を並行的に進めていくことに意義を有している。

3. 研究の方法

本研究は、次の方法で行われた。

(1) テキストデータの整備。研究の土台となる『倭訓栞』を筆頭として順次テキストデータ化を行った。実用可能な『倭訓栞』の本文テキストを整備したのちに、『東雅』や『和漢三才図会』といった先行書物と順次見出し語句の本文対照を行った。

(2) データベース構築。作成したテキストデータに対して、『分類語彙表増補改訂版』を用いて品詞分類等の情報を付与するなどし、順次データベースを構築した。状況に応じてそのデータをクロス集計していくことで、『倭訓栞』収録語彙の特性を明らかにしていくことが可能となった。

(3) 倭訓栞の内部考証の充実。最優先に整備した『倭訓栞』のデータベースを用いて、これまでの研究で確立した手法を応用する

形で調査を進め、「編纂が進む中でより多角的な記述が志向された」という想定を検証し、最終的に『倭訓栞』がどのような辞書となったか、詳細なデータを示しつつ論考に纏めていった。

(4)『倭訓栞』の諸本調査。テキストデータ・データベース構築作業に並行して、「『倭訓栞』諸本調査」に取り組んだ。写本及び版本が残存している『倭訓栞』の諸本について、その実際の分布状況を考察すべく、図書館目録類や国会図書館デジタルコレクション、「古典籍総合目録」のような電子情報を参照し、これまでに作成してきた各研究機関の所蔵リストを拡充させる傍ら、順次閲覧及び複写の申請を行った。その中で、東京都立中央図書館蔵本の「組み合わせ本」が特に大きな価値を有することが分かったため、「組み合わせ本」の調査を本格化する形で調査を収束させていった。

(5)『倭訓栞』とそれ以後との関わりについての比較調査。『倭訓栞』以降に編纂された書籍に関して、『雅言集覧』に照準を合わせて、共通する複数の典拠の扱いについて考察することで、『倭訓栞』からの影響関係を調査した。

4. 研究成果

各年度の実施計画に基づき、次の研究成果を得た。

(1)『倭訓栞』の成立過程を示す3本(自筆本・清逸本・整版本)に、それぞれ平均的な語釈より遥かに分量の多い項目があることに注目し、それらを「長大項目」と名付けて抽出し、どのような性格を持つものであるのか分析するとともに、諸本間の比較を通じて『倭訓栞』の成立過程における編纂態度の変化について考察した。本調査を通じて、『倭訓栞』の編纂が進んでいく中で、全体的に平均的な長さの語釈に纏めていきたいという谷川土清の意向が強く感じられた。その一方で、「この語だけは行数を費やしてでも語釈に分量を割くべきである」という強い信念のもとに記述された長大項目の存在が明らかになった。その結果、『倭訓栞』は当初目指した神道や上代文献に関する語彙集のような性格のものから、より一般的な語彙を追求する辞書へと編纂態度を変化させていき、最終的に「商品」として成形するにあたってさらにその度合いを明確にしていった、ということが判明した。(雑誌論文)

(2)『倭訓栞』に収められた語彙にはどのような特徴があるのかということについて、従来の研究では具体的な数値とともに示されたものは見られず、印象論以上のことは言われてこなかった。そこで、自筆本『倭訓栞』における収録語彙の性格について、先に公刊された『日本古典対照分類語彙表』の利用を試みつつ、『分類語彙表 増補改訂版』の分類に従って分析を行うことの問題点と意義を論じた。(雑誌論文)

(3)『倭訓栞』には、和語や漢語だけでなく様々な出自の言葉が収録されている。それらを語種の観点から分類することの意義と課題を述べた。特に、初期稿本である谷川土清自筆本『倭訓栞』の語彙を語種の観点で分類することで、成立過程における編纂態度の変化が浮き彫りとなった。自筆本『倭訓栞』では、起稿当初は和語を中心に語彙の収集を行っており、書名の「倭訓」もこれと密接に結びつくものと考えられる。さらにこれを清逸本『倭訓栞』と対照させることで、編纂が進む中で漢語や外来語を積極的に増補するようになり、語種に拘らずに近世当時の国語の総体を示す辞書が目指されたことが分かった。ただし、この方針転換があったものの、あくまで和語を編纂の中心に置いた拡大であったという点もまた、漢語や外来語の増補の様子から分かった。すなわち、当初定めた「倭訓」という書名が最後まで大きな影響力を持ち続け、漢語や外来語を一定の割合内に制御する役割を果たしていたのである。(雑誌論文、)

(4)東京都立中央図書館蔵本や東京大学附属総合図書館蔵本に見られる「組み合わせ本」『倭訓栞』について、語彙の増補関係が特殊な「ら行」部の項目を調査することで、従来言及されることのなかった諸本との前後関係の新たな可能性を考察し、組み合わせ本を積極的に調査・研究の対象としていくことの価値について論じた。それにより、これまでの研究では、組み合わせ本は自筆本から清逸本へと続く橋渡しのな場所に位置するものと捉えられてきたが、そのような単純な話ではないことが見えてきた(雑誌論文)。「ら行」部だけをみて素直に考えられる可能性は次の二つである。組み合わせ本は清逸本以降に作られた原稿の抄出本である。

清逸本以前に成立した組み合わせ本の本文は、後に土清が三編に分割する際に導入したものとほぼ同様の基準を以て選り抜かれた抄出本である。

このことについて、『倭訓栞』に存する空見出しに着目することで別角度から論証を重ねた結果、ほぼ同様の結論に導くことが出来た。(雑誌論文)

これによって、「組み合わせ本」『倭訓栞』が、従来指摘されてきたよりも、『倭訓栞』編纂過程(ひいては国語辞書史)解明のために大きな意義を有している書物であることを指摘することが出来た。

(5)『倭訓栞』には、証歌掲出の際のみ用いられる特異な形式があることに着目し、和歌が担っている役割について自筆本、清逸本、整版本を比較することでその変化を論じた。さらに、編者谷川土清による随筆『鋸屑譚』と比較し、辞書としての『倭訓栞』が随筆とは異なる意図から和歌を掲出する状況を示した。すなわち、随筆に馴染む「学術

性よりも話題性に富むエピソード」の類を完全には排除せず、その発現の装置として和歌を利用している様子が自筆本には見られたが、編纂が進むに連れて典拠考証も確度を増し、和歌に対する学術性の保証が進んでいくことになる。また、引用される和歌と見出し項目との関連性も増加することで、和歌は語義説明を補足する装置としての意味合いを強めていき、客観性や普遍性、妥当性を含む語釈を備えた「辞書」としての文体がより明確になる。その背景には、「他者への伝わりやすさ」を意識した編纂態度の変化があった。一方、無機質なだけの実用書ではなく、「読み物としての辞書」にも拘り、その思いを個々の和歌が持つ背景に込めたのであり、結果として『倭訓栞』は時代を超えて愛される辞書となったのであった。(雑誌論文)

この分析を通じて、考証随筆『鋸屑譚』の価値を新たに確認することにもつながった。

(6)『倭訓栞』の編纂過程における語彙増補の基準について、画一的な基準によって為されてはならず、「幅広い語彙のカバー」及び「長大な語釈による用例列挙」という2つの基準から増補が進んでいったことを明らかにした。幅広い語彙とはすなわち幅広い語義の項目であり、日本語の総体というものを思い描きながら、国語辞書としての『倭訓栞』制作を進めていく様子が編纂過程に伺える。(雑誌論文)

(7)以上の研究成果を総合して、『倭訓栞』と後発の国語辞書『雅言集覧』を対照させた結果、同一典拠(小倉百人一首、倭名類聚抄)の扱いにおいて顕著な相違点が見出された。それにより、後発の『雅言集覧』が『倭訓栞』を強く意識して編纂した可能性が浮上した。(研究発表、)

この知見が今後、近世国語辞書の成立に大きな役割を果たすことを確信し、『雅言集覧』を中心とした近世国語辞書群の到達点に関する研究」という発展的研究テーマの創出につながった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

平井吾門、『倭訓栞』の空見出しについて、国際連語論学会『鈴木泰先生古希記念論文集』、査読無、巻ナシ、2017、75-86

平井吾門、『倭訓栞』の語彙増補における編纂態度について、『弘前大学教育学部紀要』、査読無、116、2016、1-10

平井吾門、『倭訓栞』の語種 自筆本「ら行」部を中心として、延辺大学出版社『日本語文化研究』、査読有、4下、2016、220-230

平井吾門、『倭訓栞』の語種意識から探る編纂態度の変容について、『弘前大学国語国文学』、査読有、37、2016、22-43

平井吾門、『ら行』部の変遷から見る「組

み合わせ本」倭訓栞の価値について、『弘前大学教育学部紀要』、査読無、115、2016、9-15

平井吾門、『倭訓栞』の語種分類について、『弘前大学教育学部紀要』、査読無、114、2015、9-15

平井吾門、『倭訓栞』の和歌、『文学・語学』、査読有、213、2015、36-50

平井吾門、『倭訓栞』の語彙分類試論、『弘前大学教育学部紀要』、査読無、113、2015、1-8

平井吾門、『倭訓栞』の長大項目について、『弘前大学教育学部紀要』、査読無、112、2014、1-10

[学会発表](計 5 件)

平井吾門、『倭訓栞』との比較から見る『雅言集覧』の立項態度、第115回訓点語学会研究発表会、東京大学(東京都)、2016年11月13日

平井吾門、石川雅望による『倭訓栞』批判『雅言集覧』における百人一首歌の扱いを通して、平成28年度東京大学国語研究室会、東京大学(東京都)、2016年7月23日

平井吾門、『倭訓栞』の語種、第4回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2015年8月18日

平井吾門、『倭訓栞』の語彙増補における編纂態度について2015、第112回訓点語学会研究発表会、京都大学(京都市)、2015年5月10日

平井吾門、『倭訓栞』の和歌、全国大学国語国文学会第110回大会、弘前大学(弘前市)、2014年11月9日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平井 吾門 (HIRAI, Amon)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：80722214